

名古屋 文化情報

2016
11.12
November / December

No. 371
NAGOYA
Cultural
Information

随想／中川 幸作（日本写真家協会会員） 視点／愛知県美術館学芸員によるリレートーク
この人と／野々村 明子（現代舞踊家）
いとしのサブカル／河合 勝（日本奇術協会名誉会員）



2016

11・12

November / December

表紙

作品

脳内麻薬

(2015年/油彩板/42.5×20.5cm)

人類にとって摩訶不思議なもの



真島 直子 (まじま なおこ)

- 1944年 愛知県名古屋市生まれ
- 1968年 東京藝術大学美術学部油画科卒業
- 2001年 第10回バングラデシュビエンナーレ(グランプリ受賞)
- 2010年 個展「密林にて」ガレリア フィナルテ/名古屋('11,'12,'13)
- 2015年 個展「鉛筆画」Eric Linard Galerie/ラ・ガルド=アダマール、南仏
- 個展「脳内麻薬」ヒノギャラリー/東京
- 2018年 名古屋市美術館にて個展開催予定

<http://www.hinogallery.com/majima/>

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 写真の表現を求めて
中川 幸作(公益社団法人 日本写真家協会会員) …… 3

視点 愛知県美術館学芸員によるリレートーク…………… 4

この人と…
野々村 明子(現代舞踊家)…………… 6

ピックアップ 今年も御目見得!
名古屋こども歌舞伎 第七回公演に向けて…………… 10

いとしのサブカル
河合 勝(日本奇術協会名誉会員)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2015年 名古屋市民文芸祭」
(第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

木と成長とまち

藪内 久美子

名古屋市立日比津中学校3年

木はゆつくりと、それでも確実に成長する。
長い時間をかければわかるけれど、大抵の人は気付けない。

木にとっての一生と、人間にとっての一生の長さつてのは、互いに理解できないくらいの差があつて、だから、日々の生活で少しずつ変わりゆくものに気付けない。

すぐそばにある。

だけれど人は、歩いた道に生えている木の一本一本に興味など向けない。

そして木も、通り過ぎていくたくさんの人に興味など向けない。

身近にあるし、成長もするのにも、誰も、大きくなつたね

なんて褒めてくれやしない。
それでも、木も人も毎日のように、成長して、生きて、細胞と共に死んでいく。

もしかしたら、毎日出会っているかもしれない木と、木よりもずっと早くに成長して、老いていってしまう人間。

それでも二つ、ゆつくり成長して、ゆつくり大人になつていく。

随想

写真の表現を求めて



なか がわ こう さく
中川 幸作(公益社団法人 日本写真家協会会員)

1970年 写真雑誌「月刊フォトコンテスト」年度賞受賞。1990年 日本写真家協会入会。
 1992年 写真集「いまがしあわせ きんさんぎんさん100年の旅」(風媒社刊)
 2015年 第56回CBCクラブ文化賞(くちなし章)受賞。
 2016年 個展&写真集「清須ゆかりの作家 中川幸作写真展—命が煌めく瞬間」(はるひ美術館)

佐渡島に生まれた私が、写真を最初に撮ったのは、小学校6年生の時の新潟への修学旅行でした。兄の手ほどきで、カメラを借りて初めて見るネオンサイン・ビル群や好きだった同級生の女の子などをモノクロフィルムで撮影。また、それを現像・プリントしたところ、感動のシーンが浮かび上がってきたのです。この時のマジック的な驚きはずっと今でも続いています。

50年前に名古屋に出てきて、白井 薫、高間新治に師事、二科展や写真雑誌に応募し、アマチュア作家として作品を発表。当時はリアリズム写真が主流だったように思います。やがて写真表現に試行錯誤し、自分の思いは自分でしか判らないという思いから、自らの肉体を被写体として写真画面に登場する表現に変わりました。カメラのシャッターを知人に押しもらった事もありました。当時の現代美術の表現に影響を受けたように思います。その頃に写真雑誌の年度賞を受賞しましたが、当時の写真界の第一線の表現に比べ、一周遅れのトップランナーと言われたものです。

40年前にプロの写真家としての活動に入りました。その頃には、写真はやはり自分でシャッターを切らないと表現できないと思うようになってい

ました。次第に舞台写真の仕事が増え、今度は舞台の動きをとらえる難しさに直面することになりました。パレエや指揮者などの速い動きをいかに捉えるかが課題ですが、カメラのファインダーをいくら覗いていてもシャッターを切るタイミングはとれません。その時の音が重要な要素になります。舞台上の演奏・演技は概ね音楽で進行します。音を聞きながらタイミングをとるようになって初めて写真が撮れるようになりました。

今撮っている写真は、表現としてはごくオーソドックスな記録写真の領域になります。その中でも表現者の人物を数多く撮影しております。人の営みの一部ですが、写真で記録してゆく作業は重要な表現と思って続けております。写真をはじめとする映像の表現は多様になり、あいちトリエンナーレでも数多くみられます。また、写真美術館も数多く開設されましたし、美術館での写真展も多くなりました。写真の美術価値も上がったように思います。写真の持っている表現の可能性にも大変興味のあるところで、過去に自分が画面に出たころの表現が時々頭をよぎります。いつか今までとは全く違った写真表現になっているかも、それにはちょっと時間が足りないかも。

愛知県美術館学芸員によるリレートーク

富山県立近代美術館、国立国際美術館学芸員を経て、島敦彦氏が愛知県美術館館長に着任したのは2015年4月。これまでのキャリアと、私見ではあるが、わが国で最も多くの展覧会を観ている島氏が、新天地でどんな手腕を見せてくれるのか、注視していた人は少なくないはずである。その館長の提案で今年2月から「愛知県美術館学芸員によるリレートーク」が始まった。その意義を考えるとともに、内容を紹介したい。

(まとめ：森本悟郎)

教育普及活動の新たな試み

美術館を含む博物館の社会的役割は、歴史・芸術・民俗・産業・自然科学等に関する資料の〈収集保存〉、〈調査研究〉、〈展示公開〉、〈教育普及〉であることはよく知られているところで、わけても展示公開、すなわち展覧会はわたくしたち市民が最も身近に博物館に接する機会である。館に対するイメージはたい

てい展覧会を通じて育まれているといえよう。とはいうものの、博物館はもう一つ教育普及活動という市民へのアプローチも持っており、そのために多くの博物館(美術館)には教育普及担当の学芸員を置いている。欧米の美術館に行くと児童生徒たちを床に座らせ、彼らに語りかけたり彼らの問いに答えたりしている人を見かけるが、その人こそ教育普及担当学芸員である。わが国でも教育機関との連携事業やワークショップ、講演会、シンポジウムなどさまざまな取り組みを行っている。展覧会を企画した学芸員



第2回リレートーク

による作品解説などもその活動の一つである。

さて、リレートークである。第1回レジュメによれば、「学芸員の日頃の調査や研究は多岐にわたり、展覧会だけに収まりきるものではありません。展覧会では紹介しきれない当館学芸員の専門分野や、今現在興味を持って取り組んでいる研究テーマなどについてお話しする」という試みで、短い持ち時間(第1回は30分、第2回は25分)で入れ替わり立ち替わり発表するという形式である。語り口は平易を旨としているが、専門分野や研究テーマが話題だけに、内容は軽くない。それでも画像を使って視覚的に惹きつけたり、次々と発表者もテーマも変わることで、長丁場を感じさせなかった。平素、黒衣のように顔が見えない学芸員が肉声で語る場に立ち会う機会は、わたくしたちにはそれほどあることではないし、学芸員にとっても自身の専門的知見や興味を市民に話すことは稀であり、どう伝えるかというのはそれなりに重圧のかかることだったろう。

第1回

2月11日開催の第1回は午後1時から5時15分まで、途中15分の休憩をはさんで7人のトークが行われた。

島館長「保存できない芸術を記録する——アート・ドキュメンタリストの創造的視点」は、現代美術生成の現場やアート・パフォーマンスの目撃者であり記録者である写真家の紹介とともに、彼らによって残された

膨大な画像(映像)や証言資料の美術館など公的機関の連携による収集保存の必要性を訴えた。

小野寺奈津氏「フルクサスにおける印刷物の役割——コンセプト・アートの視点から」は、1960年代にニューヨークで活動した前衛芸術運動体フルクサスにおいて、その創始者ジョージ・マチューナスの手になるスコアやポスターなど、印刷物がいかにこの運動体の理念を体現していたかを解き明かした。



第1回リレートーク

を、慰問写真を事例に挙げて考察したもの。公的アーカイブの枠組みや概念について考えさせられた。

中村史子氏「地域で関係性を美学する——国際展の現場から」は、2013年に開催されたあいちトリエンナーレにおいて、長



第1回リレートークレジュメ

若山満大氏「銃後から送るイメージ——戦中日本の慰問写真について」は、表現として未成の状態にある「得体の知れない写真」から「いかに有意な情報を汲み出すのか」という今日的課題」

者町エリアで発表されたNadegata Instant Partyの作品『STUDIO TUBE』をケーススタディとして、海外の展覧会もからめながら「関係性」を重視する表現について、美学的見地から言語化する試み。

山口由香氏「描かれた四季と吉祥——江戸時代後期の花鳥画を中心に」は、鈴木其一『蔬菜群虫図』を題材に中国絵画との関係、当時の俳諧との関連、四季表現の吉祥画としての側面など、多面的に1枚の絵を解説してみせた。わけでも其一と中国絵画との関係に関する考察はユニークで感心した。

副田一穂氏「1945年からのシュルレアリスム」は、戦前、山中散生などの影響下で日本のシュルレアリスム運動拠点の一つだった名古屋の、戦後に焦点を当てた考察。これはリレートーク開催時、同館コレクション展として開かれていた「特集:1945年からのシュルレアリスム」を補完するものでもあった。

越後谷卓司氏「映像作品にみる水のイメージについて」は、自主映画の「ラストシーンは海」という定型の謎から始まり、ルイス・ブニュエルとサルバドール・ダリの『アンダルシアの犬』にその源泉をみる。その影響の広がりは大林宣彦やビル・ヴィオラ、吉田喜重、近年の山城知佳子にも及ぶという。

第2回

5月29日午後1時30分から5時まで、途中15分の休憩をはさみ、6人のトークが行われた。レジュメには第1回目と同じ文言の後に「第二回目となる今回は、これまで自明と思われてきた美術の常識やそのあり方について、批評的かつ再構築的な視点から再考を試みます」と付け加えられていた。

この日も島館長が口火を切る。「コレクション再考——美術館の現場から」は、美術館という制度も作品収集も自明のものせず、「冷静に相対化する視点」をもってコレクションのあり方について考えようというもの。欧米美術館のコレクション事情を通じて、日本の美術館が抱える悩ましい自問を浮かべさせた。

乗名彩香氏「作品をまもる、伝える——美術館における保存・修復」は、美術館外の人間には最も見えづらい裏方、コンサバター（保存修復専門員）の話。日本では数少ないが、欧米の美術館では権威ある重要な立場にある。その修復がどのように行われるのかを、実例を示しながら紹介した。

石崎尚氏「愛知のアーティスト・ラン・スペース」は、アーティストが自主的に運営するギャラリーについての話。氏によれば名古屋（愛知）は他に比べて自主ギャラリーの多い地域とのこと。いくつかの実例を挙げながら、それらのユニークな活動を

紹介するとともに、発生史、意義などについて述べた。

中野悠氏「藤井達吉とその周辺——愛知県美術館所蔵の作品・資料から」は、同館の主要コレクションである現・愛知県碧南市

出身のマルチ・アーティスト藤井達吉について、『藤井達吉関連資料総目録』をもとに紹介。工芸はもとより美術、凶案に及ぶ多彩な活動がその出自に由来することを示した。

久保田有寿氏「パブロ・ピカソの《ゲルニカ》再考——1937-1947年の受容を中心に」は、公開時の論争的評価からどのようなプロセスを経て今日の名作としての地位を得ることになったのかを辿るもの。筆者は1960年代に、同館前身の愛知県文化会館美術館で「ゲルニカ」なきゲルニカ展を観ている。

塩津青夏氏「モーリス・ルイスの《デルタ・ミュー》再考」は、コレクション展示室の中でもひととき印象的なこの作品の、戦後アメリカ絵画史とルイス作品における位置についての考察。画面両端から絵具が流れ、中央に余白をもつのを特徴とする「アンファールド」タイプにおける、同館所蔵作品の特異性も明らかにした。



島館長のトーク(第2回)



第2回リレートークレジュメ

市民と美術館をつなぐもう一つの回路として

この試みは始まったばかりで、館長はじめ学芸員諸氏もまた手探り状態かもしれない。聴講者もたまたま興味ある話題に接することもあれば、まったく興味がわ

かない話もあっただろう。率直にいえば、出来不出来もあったのではないが、しかし、この催しが学芸員たちの手弁当で行われていること、またこのような機会を待ち望んでいた人たちのことに想いを馳せれば、ながく続くよう願うばかりだ。

本稿執筆時点では、この催しは2回行われただけである。たまたま今年はいちトリエンナーレの開催があり、会場確保の困難と学芸員の多忙ということのようだが、トリエンナーレ終了後にはかたちを変えて実施することもプランとして持っているの由。どんな方法であれ、市民と美術館をつなぐもう一つの回路が開かれていることは喜ばしい。できれば予算化し、正規の美術館イベントとして定例化してもらいたいものである。



リレートークを終えて(第2回)

この人と...



現代舞踊家

の の むら あき こ 野々村 明子さん

野々村ワールドに生きる 個性的でユニークな現代舞踊家

モダンダンス一筋の熱いアーティスト、一見では年齢不詳?舞踊歴は50年余で現役舞台人。既成の枠に収まらないので賛否両論だが、バランスがとれる稀有な自由人。指導は厳しいが根っこは温かく優しく、カリスマ性を持ち人を魅きつける。演出、振付、衣裳制作、音楽構成と総合的に手掛ける仕掛人。人を楽しませて盛り上げることの巧みさには、いつも感心させられる。50年余の長い長いお付き合いであるが、あらためて異才、才女の深奥に触れた。

(聞き手：倉知外子)

日舞から洋舞に

野々村さんは一人っ子のため、母親がコミュニケーション力をつけさせたいと、幼稚園から小学校までの8年間、近所の日本舞踊教室に通わせた。おとなしく、それほど積極的でもなく普通の子であったが踊りは好きだったようだ。発表会にも出て、着物姿の可愛い日本の女の子の写真があった。名古屋生まれで、熱田区の白鳥小学校から愛知学芸大学附属名古屋中学校を受験。その入試は知能テストと面接とマラソンというユニークなもので、同小学校の受験生10人中、合格したのは1人だけであった。入学したものの、当時の教育・生活レベルが高い同級生達の存在にカルチャーショックを受けた。だが、3年間過ごした思い出と体験はその後の生き方を大きく決定づけ、高校生活にも深く影響していった。中学時代には体操部を立ち



幼少時
日本舞踊教室の発表会にて

上げ、高校時代の体操部に繋がっている。この6年間の経験は身体感覚と身体能力の高まりになったと言えよう。県立旭丘高等学校は大学受験の名門で、学業優秀への反抗精神や親友へのライバル意識もあり、17歳でモダンダンスの世界に足を踏み入れるきっかけになったようだ。今、思えばコンプレックスの塊だったと。

師 奥田敏子との出会い

「ダンスをしたい」と名古屋婦人文化センター(現在の毎日文化センター)のモダンダンス講座に入会した。母親は既に奥田敏子の存在を知っていた。その1年後に奥田敏子舞踊研究所に入門。初舞台は50年前で、奥田敏子の全作品に出演する一方、舞踊団仲間7人と「7の会」を結成して、スタジオ公演で自作自演の創作活動を開始した。1979年に師奥田が病に倒れて別れを余儀なくされるまでの間、舞踊団のメインダンサーとして活躍し、自作品も評価されていった。1975年、自作「空気が渇く」を名古屋、東京にて発表。舞踊専門誌に高く評価され舞踊界に真なるデビューをし、名古屋、大阪、東京での舞踊団公演や新人公演などにて作品を発表、注目されることになった。

師の教えを心に刻み

野々村さんが37歳の頃、毎日新聞で1982年(昭和57年)7月26日から9月27日までの週1回(10週)、「私とモダン・ダンス」と題したエッセイを連載した。全10章の内容は色褪せる事なく現在にも脈々と息づいていると感じさせられる。表題を紹介すると、1章「現代の視界の中から新たな感動を求め続ける」、2章「日ごろの欺瞞の哀しみ女の意識を問い直す」、3章「舞われた瞬間にこそ『テーマと表現』の難しさ」、4章「純潔・素朴な愛の象徴 デュエットが、いとおしく」とある。2章では1981年の作品「花嫁たち一遠ざかる風景一」について作者の目線で語られており、4章では奥田敏子の遺作「旅一心の中へ一」について触れている。続く5章「作品の中に化身する 昇華された物体として」は、奥田の代表作品ともいえる「白い家」について、ダンサーの視点で書かれている。この作品で出会った田中泯さん(舞踏家・俳優)からはそれまでの身体表現の意識をひっくり返すほどの刺激を受けた。6章「包み隠さず、ウソもなく 見る側の心を奪う」は、書店で出会ったひとつの詩から。7章「感情を剥ぎとって ちいさくとも私だけの世界」は、自作品「空気が渴く」で東京の舞台に初めて一人で立ち、舞踏批評新聞に大きく取り上げられた頃のこと。名古屋でなく東京でもらった貴重な宝物をしまいこむことなく、取り出しては息を吹きかけてこの名古屋の地で磨きたいと書かれている。8章「定式超えた広がり すべての心燃やす『まつりの場』」、9章「『出会い』期待と裏切り 頭でっかち吹き飛ばして」と題し、8章では東京の草月会館で体験した「まんだらうた」、9章では「はるがきた」の作品について触れている。終章「師の教訓を心に刻み 人との出会い大切に」の内容については、今も変わることなく持ち続けているとのこと。この10章は各章が野々村さんの舞踏理念を思慮深く、鋭く表現されていると文才を感じた。

別れと出会い

大学受験に失敗して何もかもやる気力を失くしていた時に洋裁学校へと勤めてくれたのはお母さん。そこでの3年間の体験は衣裳制作



「ラブ・ソング」 1997年
現代舞踏フェスティバル優秀賞受賞作品

に大いに役立っている。陰になり日向になり支えてくれたお母さんが55歳の若さで他界、野々村さんが31歳。この時、初めて命というものに限りがあり、その別れは容赦なく訪れることに痛いほど気づかされたが、その後、約2年

半の間に祖母2人と師 奥田敏子58歳との別れが続いた。この経験から命への想いが強くなり、その後に子どもを授からなかったことも、創作には更に深く影響したとのこと。幸せの出会いは野々村さんが21歳の時、舞踊団仲間の溝口和歌男さんと結婚。今も一緒に舞台に立ち、善き相談役として支え合っているおしどり夫婦である。時にリハーサル中に作者の女房から厳しい指摘をされても淡々とこなしていく溝口さんの様子には抱擁力を感じる。その他、師亡き後に東京の舞踏家、五井輝さんから大きく影響を受け、様々な体験を踏ませてくれた2人の舞踏家、東京の石井かほるさん、神戸の法喜晶子さんと舞台衣裳美術の前田哲彦さんに真なる感謝を今も持ち続けている。北京、ウィーン、インスブルック、ブダペスト、東京、西宮、名古屋と、35歳を過ぎても、嬉しくて楽しい踊り三昧の日々であった。

独自の創造の場

1981年、野々村明子 DANCE SPACEの活動を開始し、劇場の他、様々な空間で、他ジャンルのアーティストたちとのコラボレーションをしてきた。そのきっかけは、久保則男さんの刺激的な一言で、舞台空間を飛び出して自然との出会いを積極的に求めて活動したし、また依頼もされた。久野利博さん、庄司達さん、今井瑾郎さん、かとうさとるさん、杉浦イツコウさん、家坂ルリ子さん、磯部聡さん、長谷川哲さんほかの美術家の人達。三味線やそすけさん、帰山栄治さん、ひろおかわざんさん、真野利郎さん、若尾真理子さん、イサオササキさん、奥田敦也さん、矢野司空さん、南野梓さん、谷村武彦さん、山田武司さんほかの音楽家の人達とその都度、新鮮な出会いをした。岐阜県の白川郷、セントラルパークもちの木広場、東京NEWZギャラリー、名古屋ラポーラ、中川運河の鈴与倉庫、野外美術館、能楽堂、浜松 中田島砂



「アマリリス—五つの開花—」常滑にて
「土の中から」 1995年8月



中田島砂丘にて 1986年5、6月
「NATURAL WAVE」

中田島砂丘にて 1986年5、6月
「NATURAL WAVE」

丘、津島天王川特設水上ステージ、栄 久屋大通公園、トヨタ産業技術記念館、安城市歴史博物館、ラッキーキャット工事現場、犬山 薬師寺本堂ほか、あらゆる空間を表現する場にした。1995年からは2年間、阪神・淡路大震災への慰霊と励ましを込めて「アマリス -五つの開花」で様々な場所でのソロダンススペースを展開した。劇場、屋内、屋外を問わず300回に近い公演、表現する空間にて踊ってきた。

とりつかれて

屋外空間の魅力は自然の壮大な風景をバックにダンスすること。その自由感は何ものにも代えがたい。小さな子どもの思いがけない反応を受け止めてやり取りしているうちに、その

子どもと仲良くなったこともある。初めての屋外空間は中川運河の鈴与倉庫にて、陶芸家の鯉江良二さんとの出



「ジャスミン男」 1990年10月 名古屋市美術館

会いで、寒い冬の2月である。屋外にて陶土の感触が気持ちよく、屋内の予定をすっぽかしてしまうという瞬間の閃きを面白い無邪気さ!セントラルパークもちの木広場での「花夜話」は、コスモス千本を舞台上に敷き詰めた。テレビ塔界隈の夜景、エレベーターの上下の動きが加わり、コスモスの草木の生の匂いが体内に浸み込み、観る人も同じく匂いを共有している空間になった。白川郷では、漆黒の闇を初体験。御原祥子さんの照明でダンサーが浮か



「音と舞」 1998年8月 岐阜県 白川郷合掌の里

び上がり、中田島砂丘では足が砂にのめりこみ鉛のようになった。自然に包まれ、また自ら自然を取り込み、自然と対話をする。計算できないことがいっぱいだったと。美術館巡りでは、名古屋市美術館で海上宏美さん演出、フランスの小説を戯曲化した「ジャスミン男」で精神病棟の女を表現。博物館では、久野利博さんの美術作品にて、消し炭を敷き

詰めた床で鼻の中まで真っ黒になり裸電球による効果的な影が印象に残る。他にも豊田市美術館、岐阜では「円空」を、などなど…。

「野はらよりの手紙I~V」

作家は、その時々を生み出す作品に全身全霊を注ぎ作品化するのだが、

敢えて最も思い出深い公演を伺ってみた。1989年2月から12月にかけて、帰山栄治作曲、かとうさとる美術、御原祥子照明による公演を2か月ごとにソロダンス作品として、七ツ寺共同スタジオで5通発表をしつづけた「野はらよりの手紙I~V」とのことである。都会に野原を持ち込み草木の香りを季節毎に取り込みたいと小空間にし



「野はらよりの手紙・1通目」 1989年4月
名古屋 七ツ寺共同スタジオ



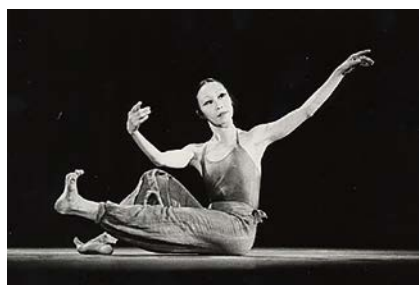
「野はらよりの手紙・2通目」 1989年6月
名古屋 七ツ寺共同スタジオ

た。かとうさとるさんが草むらで草をトラックいっぱい刈ってきて敷き詰めたが、その中には虫がいっぱいで、さんざんだった事が忘れられないようだ。DANCE SPACEは全てが野々村さんの財産であり、舞台は勿論、様々な空間で展開し、その都度出会った他ジャンルのアーティスト達との共同創造は素晴らしい宝物だ。その時、その場、その瞬間に生まれたダンスは儚いが愛おしさが募ると言われる。その成果の先に、数々の受賞を得た。

受賞歴

師を亡くしてから初めて挑んだ自作「通りゃんせ」では、1983年(昭和58年)現代舞踊協会制定 奨励賞を受賞。同年、週刊音楽新聞新人ベストテンに選ばれる。1984年(昭和59年)には、法喜晶子、石井かほる作品のダンサーとしての評価で第15回舞踊批評家協議会協会賞を「眉かくしの霊」「石ころのうた」で受賞。同年、それまでの活動が評価され、今後の活躍を期待されて名古屋市芸術奨励賞も受賞した。その後は、1987年(昭和61年)に「オギャ

ア」と「もう蝶をはなせない」で芸術選奨文部大臣新人賞、1993年(平成5年)に「ウチカケ」で第1回世界バレエ・モダンダンスコンクール特別賞、1997年(平成9年)に「ラブ・ソング」で現代舞踊協会制定 現代舞踊フェ



「通りゃんせ」
現代舞踊協会制定 奨励賞 受賞作品 1983年



「もう蝶をはなせない」 1987年
この作品と「オギャア」で
芸術選奨文部大臣新人賞受賞

スティバル優秀賞、2007年(平成18年)に「鬼子母神さま降りて舞いて候ふ」で名古屋市民芸術祭審査員特別賞を受賞した。その他にも、東京 博品館劇場杯舞踊フェスティバル銀賞、パチンコ大衆文化賞、旭丘 鮎光会顕彰受賞と評価され活躍されてきた証が並ぶ。

70歳にして思う

1986年に、ダンサーを育成し一緒に踊る仲間の集う場、「野々村明子DANCE SPACE GYMNASIUM」を設立し、「ほのぼのリサイタル」と題して15年間ダンスジム団員の作品を発表もした。その3年前からアーティスト達が気軽に集う場を設けたいと「CAFÉ 花いちりん」も経営していた。一般の近所の人たちにもモダンダンスを知ってもらおう場にと、店内は舞台写真などがデコレートされている。20年ほどで閉店しているが、セピア色になっ



2015年 アートな身体(からだ)PROJECT「DANCEで会おう」
市民ギャラリー矢田

ている当時の写真が懐かしさと活躍の歴史を感じるアトリエに今はなっている。振付、企画、指導などでも舞踊は勿論のことであるが、オペラ、演劇、音楽、美術の振付、演出などオリジナリティーを発揮、教育分野にもその才能を認められ、複数の大学講師を勤めていた。現在は、(一社)現代舞踊協会中部支部副支部長、名古屋洋舞家協議会運営委員事業部長の重要な任務に就き、次世代に名古屋洋舞界の将来を託したい思いで様々な役を引き受け、多忙な日々である。あいちトリエンナーレ2016舞台芸術公募プログラムでは、(一社)現代舞踊協会中部支部の会員が総結集した公演「『ガリバー』～人間(人体)への不思議な旅～」の演出をし、自らもダンサーとして踊った。年齢を重ねたとは言うものの、そのパワーには凄い迫力があつた。野々村さんは、「世代交代を感じているが、何処かで踊りたくなったら踊りたい。若い頃にはライバルであった舞踊仲間共々、ライバル意識から解き放された年代になっているので、何でも語り合える同胞になればと思っている」と語る。コンプレックスの塊から解放される実力と自信を得て数え切れないほどの創作活動を展開してきた。その50年余りの時の経過から、真なる自由を手中にしている舞踊家がそこに存在し「生涯現役」と明るく高い声を発していた。金婚式もすぐそこまで近づいている。

「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、FAX、Emailまたは郵送にて**11月30日(水)【必着】**までにお送りください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼント**いたします。
※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

- 内容について、どう思われますか。
①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない
- 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)
①表紙 ②名古屋市民文芸祭受賞作品 ③随想 ④視点 ⑤この人と
⑥この人と…ズームアップ(1・2月号のみ掲載) ⑦ピックアップ ⑧いとしのサブカル
⑨1年をふりかえって(3・4月号のみ掲載)
- 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
- 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題や、コーナーがありましたら、ご記入ください。
- ご回答いただいた方の①お名前 ②性別 ③年代(30代など) ④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階
(公財)名古屋市文化振興事業団・文化情報アンケート係
FAX: (052) 249-9386 Email: tomo@bunka758.or.jp

ピックアップ

今年も御目見得! 名古屋こども歌舞伎 第七回公演に向けて

小中学校の夏休みも残りわずかになった土曜日、「名古屋こども歌舞伎」の稽古場を訪ねた。この「こども歌舞伎」は、平成22年に名古屋開府400年を記念して発足、今年7年目を迎える。メンバーたちは、御園座舞台美術製作場3階（名古屋市中区）を稽古場に、年明け1月22日の公演に向けてセリフの稽古に励んでいた。



指導者の熊谷さんと子どもたち

7期生にあたる新メンバーは、まずしっかり声を出してい

く。一方ベテランたちは、6月に決まった配役のセリフがすでに板についており、驚かされる。「歌舞伎は、自分からやってみたいと思ったの?」と尋ねると、みんな、顔を見合わせてもじもじしている。「お家の方などから勧められて?」という問いには、一斉に手が挙がった。

きっかけは他薦でも、稽古中の表情には「いやいや」感が全くなく、みんなやる気に満ちあふれている。「いちど衣装を着付けてもらい、化粧をしてもらい、舞台上立つと、八割がたの子は“はまって”抜けられなくなっちゃいますね」と、指導にあたっての熊谷好幸さん（新城山・臼子歌舞伎保存会会長）は笑う。発足当時小学生だった1期生は、すでに高校生。中には、見た目が“こども”でなくなっても、黒子や裏方として参加し続けているメンバーもいるという。みんな、ほんとうに歌舞伎が好きなのだ。

何かと忙しい現代の小中学生だが、他の習い事や部活動と両立しながら、月2回（夏休みと冬休みは集中的）の稽古に、ほとんど休むことなく参加しているという。まずは、あいさつの仕方から。そして声を出し、日本の芸能に特有の体の動きを身につけ、所作を覚えていく。公演の一ヶ月前から浴衣での稽古に入り、本番にはきっちり舞台上に立てるようになる。

メンバーは広く市民から公募され、月謝や舞台料といった諸経費も他の習い事と比べて変わらない。子どもの頃から

歌舞伎や邦楽に親しんでほしいという、実行委員会のスタッフや、御園座といった協力者たちの熱意に支えられた活動である。

「名古屋在住の子どもたちが、名古屋で演じることに意味がある。地域で奉納される地芝居（じしばい）の精神なんです」と、実行委員長の安田文吉さん（東海学園大学教授）は語る。歌舞伎に馴染んでいくうちに、日本の伝統芸能に脈々と受け継がれている本質的なもの——たとえば、亡き人への鎮魂の気持ちなどが、何となくわかってくる。そうした精神が大切なので、稽古に無理があってはいけない。前出の熊谷さんも指導の際には、型にはめすぎることなく、楽しんで取り組んでもらえることを第一に考えているという。



本番の様子
（平成28年1月24日 青少年文化センター）

もっとも、こうした大人たちの心配はご無用とばかりに、子どもたちの声は明るい。歌舞伎独特の抑揚を持ったセリフは難しそうだが、熊谷さんの後について何度か繰り返すうち、あっという間に歌舞伎らしくなっていく。

この子たちが案内人となって、伝統芸能の裾野がどんどん広がっていったら…。そう想像すると、“芸どころ名古屋”の未来が、たいへん明るいものに思えてくる。1月の晴れ舞台に向けて、声援を送りたい。(Y)

●公演情報

名古屋こども歌舞伎 七ツ重ねの御目見得

日時：平成29年1月22日(日)

昼の部10:30 夜の部14:30

会場：青少年文化センター アートピアホール

料金：大人1,000円 小学生以下500円

いとしの サブカル

マジックに魅せられて50年

日本奇術協会名誉会員

かわい まさる
河合 勝

1945年 愛知県蒲都市生まれ。三重大学教育学部卒。元愛知江南短期大学教授。奇術史研究者。1982年 第15回 FISM ローザンヌ大会に出演。著書に『日本奇術演目事典』（日本奇術博物館）、『日本奇術文化史』（日本奇術協会）などがある。

忘れもしません。私がマジックを始めたのは伊勢湾台風が吹きぬけた翌日の昭和34年（1959）9月27日のこと。その日から練習や研究に明け暮れる毎日でしたが、いつしか大きな夢を抱くようになり、東京、スイス、スペインで開かれた世界奇術大会に出演することができました。

1985年、文化センターのマジック講座を受け持つことになりました。受講生に技だけでなく歴史的な事柄も伝えたいとの思いから奇術資料の収集を始めましたが、次第に日本の奇術の歴史に興味を持つようになりました。

江戸時代の日本手品は約360種。そのなかにはユニークな演目もあります。たとえば「尻の穴より煙を出す法」は、今では考えられないような手品です。火吹き竹にタバコの煙を詰め込んで栓をし、懐に隠して客席に出ます。「ただ今より、お尻の穴から煙を出してご覧に入れます」と、後ろ向きになり、尻をまくってうつ伏せになります。火吹き竹の栓を抜き、ふんとしに突っ込んで吹くと、お尻から煙が出てくるというものです。これも確かに手品ですが、今、こんな下品な手品を演じるマジシャンは絶対にいません。

また「三つ目妖怪の術」は、暗闇に火を吹く三つ目の妖怪が現れるというものです。これはすごい手品かと、伝授



「尻の穴より煙を出すでん」（明治初期）



「水がらくり桶ぬけ」（公益財団法人東洋文庫所蔵）

本を読むと「ホタルを三匹捕まえてきて、額と両脇に貼りつけ、火の残っている消し炭を口にくわえて思い切り吹きなさい」とあり、本当に拍子抜けしてしまいます。

しかし、なかには素晴らしいものもあります。尾張藩士の小田切春江（号・歌月庵喜笑）が記録した絵日記『名陽見聞函会』の天保7年（1837）6月に名古屋広小路で竹田正五郎という手品師が「水がらくり桶ぬけ」という大手妻を演じたとあります。太夫は水の入った大桶に飛び込んで、蓋をして錠をおろさせます。ほどなくして、太夫は桶の中から脱出するというもので、これはアメリカの脱出王・フーディーニが演じた「水槽からの脱出」（1908年）の71年前のことです。

日本の手品のルーツは、奈良時代に中国から伝来したとされていますが、現存する最も古い記録は鎌倉時代です。それ以来、延々と、しかも細々と続けられてきた手品。古代から現代まで、有名無名の奇術師たちは不思議な技を見せて、人々の心を楽しませてきました。しかし、ほとんどの奇術師は、はかなくも人知れず歴史の片隅に消えていきました。

私が子どもの頃、からの箱から6個の目覚まし時計を出したマジシャン。あのベルの音、今でも鮮明に覚えていますよ。



やっとかめ文化祭
なごや・まちなか・旅

やっとかめ文化祭 ~芸どころ・旅どころ・なごや~

「やっとかめ文化祭」は名古屋の歴史・文化の魅力を一室に集めた、文化の祭典。「辻狂言」をはじめ、多彩な伝統芸能の公演や、体験講座・ワークショップ、まち歩きなど、まちを舞台に、知られざる名古屋の魅力に出会う23日間です。

◆日 程：平成28年10月29日(土)~11月20日(日)
 ◆主 催：やっとかめ文化祭実行委員会

＜構成＞名古屋市(文化振興室、観光推進室、歴史まちづくり推進室)、(公財)名古屋市文化振興事業団、(公財)名古屋観光コンベンションビューロー、中日新聞社、名古屋観光ブランド協会、特定非営利活動法人 大ナゴヤ・ユニバーシティ・ネットワーク

◆問い合わせ：やっとかめ文化祭実行委員会(NPO法人 大ナゴヤ・ユニバーシティ・ネットワーク内) TEL052-262-2580

※事業の詳細は<http://www.yattokame.jp/>をご覧ください。

古典の日記念公演 まちに響く日本の音

◆日時：10月30日(日)15:00~
 ◆会場：大須演芸場
 ◆料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

能「草薙」狂言「昆布売」

◆日時：11月3日(木・祝)14:00~
 ◆会場：名古屋能楽堂
 ◆料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

唄って踊って民謡ふるさとの調べ

◆日時：11月6日(日)14:00~
 ◆会場：青少年文化センター アートピアホール
 ◆料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

ひと組プロデュース 時代横町 ~大須版~

◆日時：11月18日(金)18:30~
 19日(土)11:00~、15:00~
 20日(日)14:00~
 ◆会場：大須演芸場
 ◆料金：一般3,000円 学生1,500円
 【日時指定・自由席】



オープニング

◆日時：10月29日(土)13:00
 ◆会場：ナディアパーク2階アトリウム
 ◆料金：無料

芸どころまちなか披露

辻狂言、ストリート歌舞伎、端唄、箏曲、お座敷芸など、名古屋のまちなかで伝統文化に出会う各種ライブを開催。
 ◆期間：10月29日(土)~11月20日(日)
 ◆会場：大須商店街ふれあい広場 ほか

まちなか寺子屋

歴史的な建造物などで、歴史や伝統文化を楽しく学ぶ講座・ワークショップなどを実施。〈全29講座〉
 ◆期間：10月29日(土)~11月20日(日)
 ◆会場：本蓮寺 ほか
 ◆料金：500円~3,500円

まち歩きなごや

名古屋の魅力を再発見する「まち歩き」を実施。
 〈全47コース〉
 ◆期間：10月29日(土)~11月20日(日)
 ◆会場：市内各所
 ◆定員：各回20名
 ◆料金：500円~(1回)

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー

アートディレクター

印刷コンサルタント

株式会社 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
 感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。



株式会社 エーアンドビー
 舞台音響 / 映像設備
 設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドビー
 〒464-0846 愛知県名古屋市中区城木町二丁目98
 TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
 ハイビジョンで撮影し
 ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
 TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
 ◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社 マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
 TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営